

30. 三重県明和町

対象地域	三重県明和町 斎宮エリア			
申請主体	一般社団法人明和観光商社			
計画名	「祈りのみやこ斎宮」におけるオーバーツーリズム未然防止 & 持続可能な観光地づくり計画			
観光客データ		平成31年	令和5年	令和6年
	入込観光客数(千人)	251	246	269
	-国内	251	245	268
	-訪日外国人旅行者	N/A	0.1	0.1
地域の特徴・観光資源等	<ul style="list-style-type: none"> 明和町は伊勢平野の中央に位置し、伊勢湾や河川などの豊かな自然と、古代より伊勢神宮と深く結びつく歴史を有する。 中核的観光資源は国指定史跡斎宮跡(約137ha)で、約660年間皇女「斎王」が伊勢神宮に仕えた宮殿跡地。日本遺産「祈る皇女斎王のみやこ斎宮」として認定され、独自の歴史文化と「祈り」の精神性を伝える。 史跡内には斎宮歴史博物館、いつきのみや歴史体験館、さいくう平安の杜等が整備され、斎王制度や当時の暮らしを学び体験できる。 			
協議体制	協議の場			
	日本遺産活用推進協議会			
	参加者			
	行政機関	有識者等		
<ul style="list-style-type: none"> 斎宮跡・文化観光課 まちづくり戦略課 産業振興課 等 	<ul style="list-style-type: none"> 皇學館大学等の歴史・観光・地域づくり専門家 外部コンサルタント 等 			
	事業者	住民関係者		
<ul style="list-style-type: none"> 町内観光関連事業者 交通事業者 観光協会、商工会 等 	<ul style="list-style-type: none"> 斎宮地区自治会 花守グループ代表 めいわ観光まちづくり研究会 			

エリアマップ



斎宮歴史博物館



発掘が続く
国指定史跡斎宮跡



復元建物
「さいくう平安杜」





国指定史跡斎宮跡を使った観月会



明和町最大の祭り『斎王まつり』の斎王群行の様子。平安時代の華やかな衣装を纏い、斎王の旅路を再現する

2. 課題

	主な現状・問題点	影響を受けている主な対象
1. 特定のイベント時の局所的な観光客集中と混雑	<ul style="list-style-type: none"> ・ 斎王まつり、観月会、プロジェクションマッピング等の主要イベント時、特にクライマックスや人気プログラムの時間帯に、さいくろ平安の杜やいつきのみや歴史体験館周辺など特定のエリアに来場者が過度に集中し、移動困難な状況や観覧環境の悪化が発生している。 ・ これにより、十分な安全確保への懸念や、来訪者の満足度低下を招くリスクがある。 	観光客、イベント運営者、史跡・文化財、地域住民（安全面）
2. イベント時及び週末を中心とした交通アクセス課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主要イベント開催時には、会場周辺の駐車場が早々に満車となり、周辺道路での渋滞や違法駐車が発生。公共交通機関（近鉄斎宮駅）からの二次交通も十分とは言えず、来訪者のスムーズなアクセスを阻害している。 ・ これにより、地域住民の日常生活（通勤、買い物等）にも影響が出始めている。 	観光客、地域住民、交通事業者、イベント運営者
3. 史跡の神聖な雰囲気と環境への負荷増大懸念	<ul style="list-style-type: none"> ・ 来訪者増加に伴い、特にイベント時を中心にゴミのポイ捨てや分別不徹底、騒音などが増加傾向にあり、国指定史跡である斎宮跡の神聖で静謐な雰囲気が損なわれることが懸念される。 ・ 広大な史跡内の未舗装部分などでは、無秩序な散策による植生への影響や、文化財保護上重要な遺構への意図しない負荷も将来的に危惧される。史跡の維持管理経費の増大も課題である 	史跡・文化財、自然環境、観光客（体験の質）、DMO・行政（維持管理）
4. 地域住民の観光への関与と裨益実感の希薄化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観光客増加による一部の負担（騒音、混雑等）を感じる住民がいる一方で、観光がもたらす経済的・社会的恩恵を直接的に実感しにくい住民も存在する。 ・ 史跡保全や観光振興への住民の主体的な関与を促し、地域全体で観光客を温かく迎え入れる体制を強化する必要がある。 	地域住民、DMO・行政（地域との連携）
5. 特定の時間帯・場所への観光利用の集中	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日中の特定の時間帯や、史跡内の限られた有名スポット（例：さいくろ平安の杜）に観光客の利用が集中し、他の時間帯（早朝、夜間）や広大な史跡内の多様なエリア、町内の他地域資源が十分に活用されていない。 ・ これにより、来訪者の体験の多様性が損なわれ、平準化による混雑緩和の機会も逸している。 	観光客（体験の多様性）、史跡・文化財（一部への負荷集中）、地域経済

1 イベント時を中心とした混雑



交差点に観光客が集中し、混雑と安全上の課題が発生

2 特定時間帯の交通混雑



生活道路で渋滞が発生し、地域住民の安全や日常生活に支障

3 史跡周辺の環境負荷懸念



ゴミ箱がすぐに満杯となり、ごみ処理や美観維持に課題が生じている

3. 背景・要因

主な背景・要因

1. 観光需要の急速な回復と将来的な増加予測

- ・ コロナ禍で一度落ち込んだ観光客数は令和5年に約24.6万人まで回復し、コロナ禍以前の水準に迫っている。
- ・ 令和6年以降は訪日外国人旅行者需要の増加も見込まれ、特に9年後に予定される伊勢神宮式年遷宮に向けて、観光客の大幅な増加が予測される。この需要の増加が、既存の受入体制への大きな圧力となっている。

2. 観光利用の需要集中構造

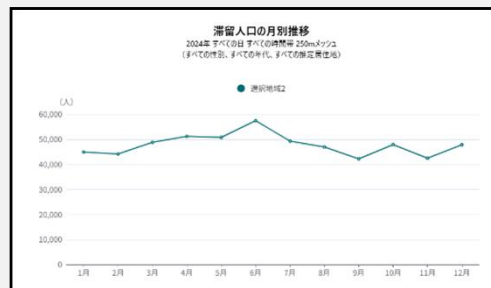
- ・ 時間的集中: 観光客の利用が日中の特定の時間帯に偏る傾向がある。加えて、「斎王まつり」や「観月会」などの主要イベント開催時には、ごく短期間に多くの来訪者が集中し、キャパシティを超えるリスクが生じている。
- ・ 空間的集中: 広大な斎宮跡（約137ha）の中でも、「さいくう平安の杜」など特定の有名スポットに来訪者が集中し、敷地内の他のエリアや町内の他地域資源が十分に活用されていない。

3. 二次交通と受入環境の脆弱性

- ・ 最寄り駅（近鉄斎宮駅）からの二次交通も十分ではなく、来訪者の円滑な移動を阻害する要因となっている。
- ・ 来訪者の増加に対し、ゴミ箱の容量不足や休憩スペース、多言語対応の案内などが追い付いておらず、環境負荷の増大や満足度の低下を招いている。

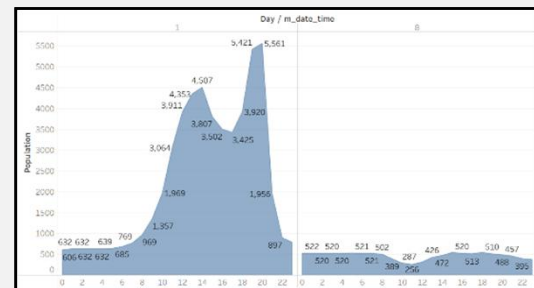
4. 地域住民への裨益実感の希薄さ

- ・ 観光客増加に伴う騒音、混雑、交通渋滞といった負担を一部の住民が感じる一方で、観光がもたらす経済的・社会的な恩恵を直接的に実感しにくい住民も存在する。
- ・ このため、地域全体で観光客を温かく迎え入れる体制の強化や、住民が主体的に観光に関わる仕組みづくりが課題となっている。

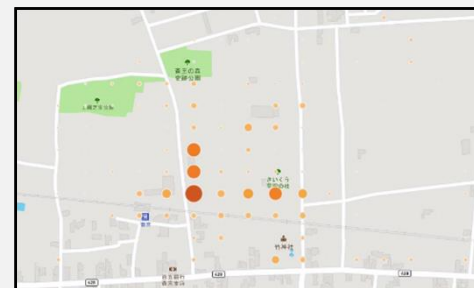


観光需要の急速な回復と将来的な増加予測

コロナ禍を経て観光需要はV字回復しており、特に主要施設である「さいくう平安の杜」では、週末を中心にコロナ禍以前を上回る賑わいを見せる日も出てきている。



時間的集中：特定のイベントへの極端な集中
年に一度開催される「斎王まつり」では、1日で数万人規模の来訪者が集中し、会場周辺は大変な混雑となっている。このような特定のタイミングに来訪者が集中することで、来訪者の不便だけでなく、騒音・混雑・交通渋滞等、地域住民の生活への影響が大きく、負荷となっている。



空間的集中：広大な史跡内での利用の偏り
斎宮跡は約137haと広大ですが、来訪者の多くは「さいくう平安の杜」や「斎宮歴史博物館」といった特定のエリアに集中。一方で、史跡内にはまだ十分に活用されていないエリアが点在しており、回遊性の向上が課題である。

二次交通と受入環境の脆弱性

イベント開催時や観光シーズンには、主要な駐車場が早々に満車となり、周辺道路では入庫を待つ車による渋滞や、路上駐車が発生。また、公共交通機関（近鉄斎宮駅）からのアクセスも徒歩がメインとなり、高齢者や子供連れの来訪者にとっては負担となっている。

地域住民への裨益実感の希薄さ

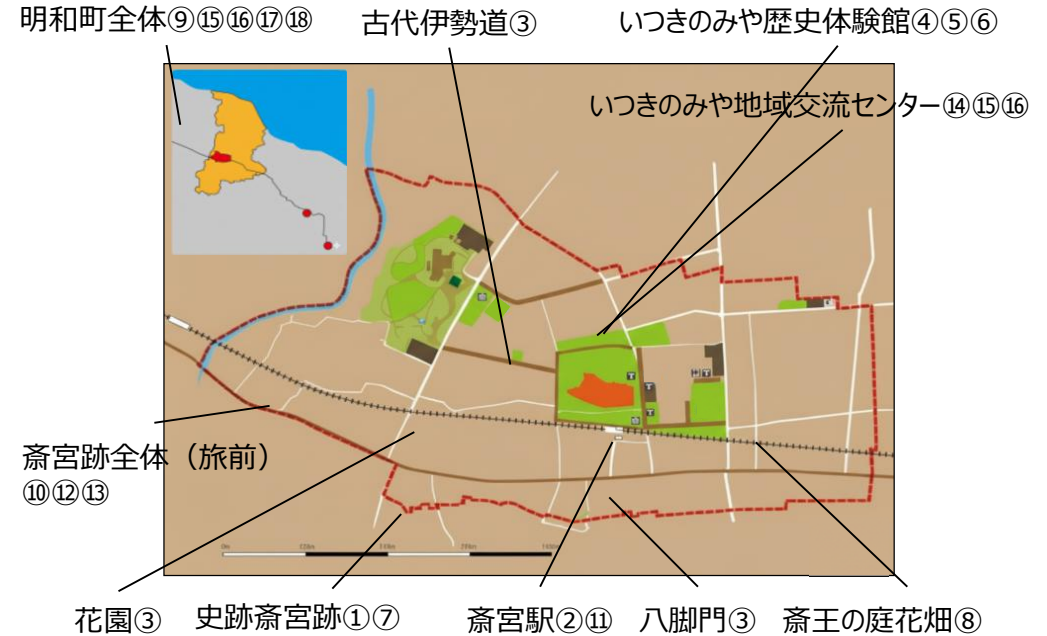
観光客の増加は地域に経済的な恩恵をもたらす可能性がある一方で、交通渋滞や騒音といった直接的な負担を住民が感じています。この負担感に対し、観光がもたらすメリットを住民一人ひとりが実感できるような仕組みづくりが不可欠。

4. 対策の概要

目指す姿	国史跡齋宮跡の歴史的・文化的価値と神聖な雰囲気とが保全・継承され、多様な来訪者が質の高い体験を通じて心豊かな時間を過ごすことができる。同時に、地域住民が齋宮の価値を誇りに思い、観光客を温かく迎え入れ、観光による恩恵を実感しながら共生する、「祈りのみやこ齋宮」として国際的にも認知される持続可能な歴史文化観光地を目指す。
KGI	(指標) 多くの観光客が明和町・齋宮跡を訪れることを誇らしいと思う住民の割合 現状値：48.0% (令和7年度) 目標値：75.0% (令和14年度)
	<ul style="list-style-type: none"> 「祈りのみやこ齋宮」の歴史的価値を守り、オーバーツーリズムを未然に防ぐ持続可能な観光地を目指す。来訪者満足度と地域経済への貢献度向上のため、①需要の分散化、②交通・受入環境のDX化、③高付加価値な体験造成、④住民が主役となる地域共生、の4つを重点事業として推進する。

■ 補助事業の実施概要

受入環境の整備・増強	
①	史跡齋宮跡環境配慮型周遊モビリティ運行体制強化と魅力向上事業 ・ 来訪者の二次交通の利便性と歴史文化体験の質を向上させる。これにより、自家用車利用から公共交通・二次交通への転換を促進し、齋宮エリア内の面的・時間的な周遊を促すことで、特定地点・特定時間への観光客の集中を緩和・分散する。
②	「手ぶら齋宮さんぽ」実現に向けた来訪者利便性向上実証事業 ・ 来訪者の手荷物に関する負担を軽減し、身軽で快適な史跡散策と広域周遊を促進する。これにより、滞在時間の延伸と消費機会の拡大を図り、多様な来訪者の満足度向上に貢献する。
③	史跡齋宮跡「祈りの小径」快適な休憩・衛生環境創出事業 ・ 史跡全体の受入環境キャパシティを向上させるため、景観に調和した質の高い休憩・衛生施設を戦略的に整備。これにより、来訪者の滞在快適性を高め、周遊エリアの拡大と滞在時間の延伸を促進する。特定の中心部への過度な集中を未然に防ぎ、将来のオーバーツーリズム発生リスクを低減させる。



需要の適切な管理	
④	齋宮高付加価値体験スマート予約システム導入による需要最適化事業 ・ 少人数・高付加価値型体験プログラムに対し、多言語対応のオンライン事前予約・時間指定制を導入・強化する。これにより、来訪者の利便性と満足度を高めると同時に、特定時間への需要集中を避け、需要の最適化を図ることで、文化資源の適切な保全と持続可能な運営に貢献する。
⑤	来訪者満足度向上と持続可能な運営のためのスマートアクセス導入事業 ・ 主要イベント開催時、特に混雑が予想される特定観覧エリアや体験プログラムに対し、事前予約制及び一部有料化を導入する。これにより、来訪者の安全確保と快適な観覧環境を提供すると同時に、イベント全体の混雑を平準化する。また、収益確保による運営の持続可能性向上を図る。
⑥	高付加価値体験におけるダイナミックプライシング導入検討・効果検証事業 ・ 補助事業④で導入するスマート予約システムを基盤とし、需要管理の高度化を図る。一部の高付加価値体験で顕在化しつつある需要の集中に対し、価格メカニズムによる需要平準化の有効性を、限定的な実証実験を通じてデータに基づき検証する。将来の本格導入に向けたリスクと効果を把握し、持続可能な需要管理手法の確立を目指す。

4. 対策の概要

需要の分散・平準化

⑦史跡齋宮跡リアルタイム混雑情報配信による来訪者周遊最適化事業

- リアルタイムの混雑状況を可視化・情報提供することで、来訪者の自律的な行動変容を促し、特定地点への集中を緩和する。同時に、将来の伊勢市等との広域連携を見据え、拡張性の高いデータ連携基盤を構築し、より広域的な周遊最適化を目指す。

⑧住民共創「齋宮花と大地のめぐみ」育てる史跡管理体験プログラム造成事業

- 住民と来訪者の「共創」を通じて史跡の景観を育み、新たな魅力を創出する。これは単なる体験コンテンツ開発ではなく、住民が主体的に関わることでシビックプライドを醸成し、来訪者との交流を通じて地域への愛着を深めてもらうプロセスである。中心部から離れたエリアに新たな魅力を創出することで、来訪者の分散を促進する。

⑨明和町まるごと魅力発見「齋宮プラスワン」周遊コンテンツ造成事業

- 史跡齋宮跡への来訪者の関心を町内全域に広げ、齋宮跡からの面的・地理的な分散を促進する。そのために、史跡以外の地域資源を活用した魅力的な周遊コンテンツを造成し、来訪者の選択肢を増やすことで、史跡中心部への集中緩和と町内全体の活性化に貢献する。

マナー違反行為の防止・抑制

⑩「齋宮レスポンスブル・ツーリズム」行動指針策定及び国際的情報発信事業

- 史跡の価値と地域への敬意を促す、地域と来訪者の共通言語となる「行動指針」を策定する。本指針を後続のマナー啓発事業（⑪、⑫、⑬）の基本方針と位置づけ、一貫性のあるメッセージを発信する。ターゲット層に合わせた最適な手法で国際的に発信し、来訪者の自発的なマナー向上を促す。

⑪多言語対応型・共感促進型マナー啓発ツール制作・展開事業

- 補助事業⑩で策定した「行動指針」を、多様な来訪者（特に外国人観光客や若年層）が直感的に理解できる具体的なアクション（OK/NG行動）へと翻訳する。ピクトグラムやショート動画等の視覚的なツールを制作し、旅マエ・旅ナカの主要な接点で展開することで、指針の理解度と実践を促す。

⑫「齋宮こころ旅」エンゲージメント型マナー啓発コンテンツ開発・展開事業

- 補助事業⑩・⑪と連動し、来訪者の内面的なマナー意識の醸成を目指す。物語体験を通じて齋宮の歴史や「祈り」の精神性への共感を促し、現地訪問への期待感を醸成する。旅マエの学びを旅ナカの行動に繋げ、より質の高い観光体験と地域との良好な関係構築に貢献する。

⑬「齋宮ウェルカムシップ」育成による地域一体型マナー啓発体制構築事業

- マナー啓発関連事業（⑩、⑪、⑫）で策定・制作した指針やツールを、観光客と直接接する地域人材が効果的に「実践」できるようにする。共感型のコミュニケーションスキルを習得した人材「齋宮ウェルカムシップ」を育成し、地域全体で一貫性のある質の高いおもてなしとマナー啓発を提供する体制を構築する。

地域住民と共同した観光振興

⑭「サステナブルツーリズム円卓会議」開催による住民理解促進・合意形成事業

- 本計画全体の進捗や課題（特にオーバーツーリズム関連）を地域住民と透明性高く共有し、双方向の対話を通じて持続可能な観光地づくりへの理解と協力を得る。多様な住民の意見を計画に反映させることで、住民が主体的に関わる合意形成のプロセスを構築する。

⑮「明和観光みらい共創レポート」発行による地域への観光裨益共有事業

- 観光による経済効果や交流の様子を分かりやすく伝え、「観光が地域に良い影響を与えている」という実感と共感を醸成する。これにより、住民の観光への理解を深め、オーバーツーリズム対策を含む持続可能な観光地づくりへの参画意識を高める。

⑯めいわ持続可能な観光共創プロジェクト

- 住民が主体となり、オーバーツーリズム対策に資する小規模・高付加価値な観光コンテンツを企画・運営する人材を育成する。これにより、来訪者の多様なニーズに応えつつ、時間的・空間的な分散を促進し、住民自身が持続可能な観光の担い手となる共創モデルを構築する。

調査・分析

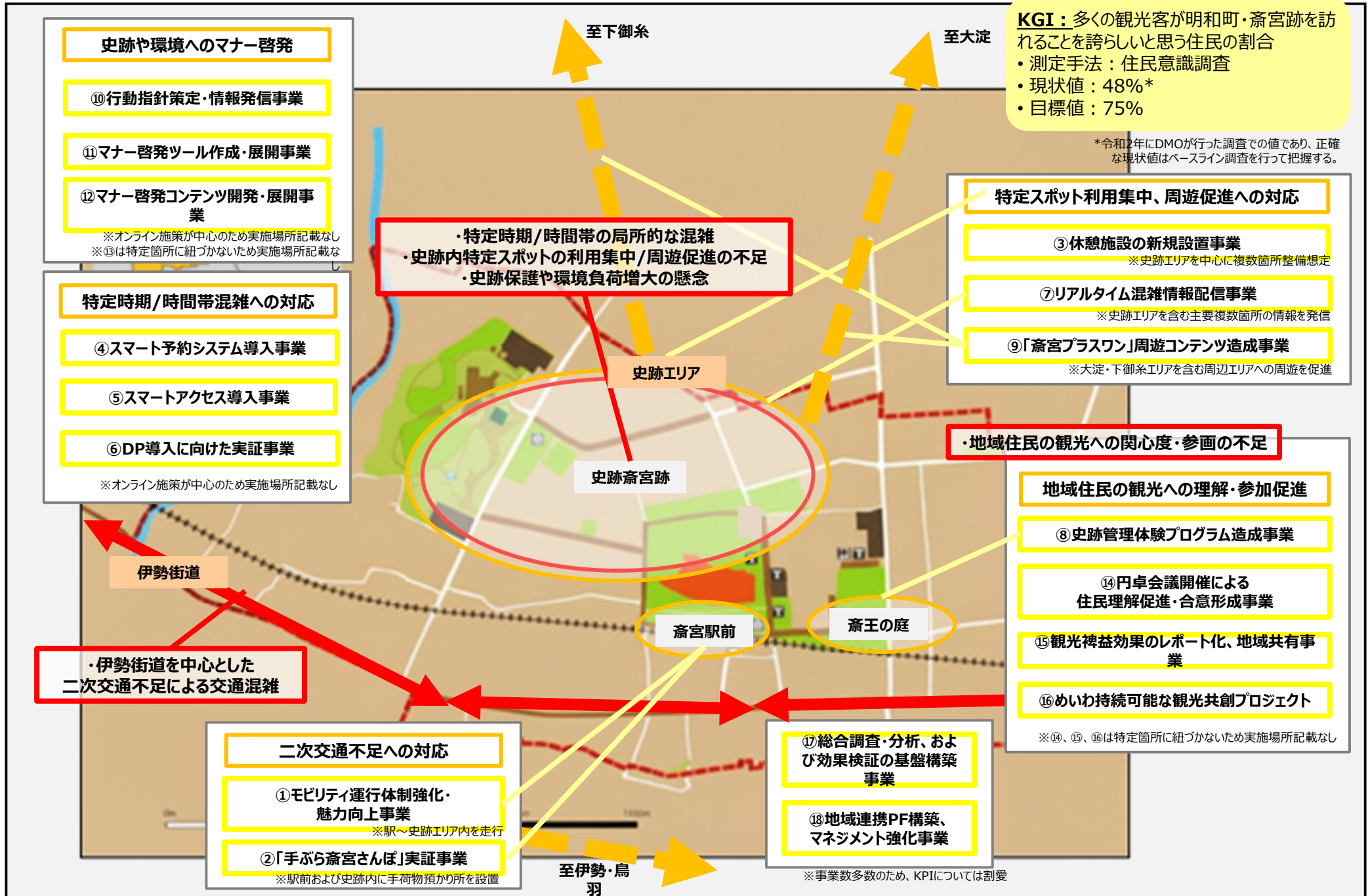
⑰持続可能観光推進のための総合調査・分析及び効果検証基盤構築事業

- 本対策計画全体の効果を客観的データに基づき検証し、データドリブンな意思決定を可能にする基盤を構築する。観光の正負両側面を可視化し、その結果を住民と透明性高く共有することで、憶測や感覚論ではない、事実に基づいた対話を促進し、計画全体の改善と持続可能な観光地経営に貢献する。

調査・分析

⑱持続可能な観光推進のための地域連携プラットフォーム構築・マネジメント強化事業

- 本対策計画全体の実効性を担保するための司令塔（プラットフォーム）として機能する。多様な関係者との連携・合意形成を主導し、各補助事業の進捗管理と事業間連携を促進する。補助事業⑯のデータを活用し、データに基づく的確な意思決定と計画の柔軟な見直しを行い、プロジェクト全体の目標達成を確実なものにする。



5-①. 主な取組（詳細）

受入環境の整備・増強

補助事業①	史跡齋宮跡環境配慮型周遊モビリティ運行体制強化と魅力向上事業		
事業目的	来訪者の二次交通の利便性と歴史文化体験の質を向上させる。これにより、自家用車利用から公共交通・二次交通への転換を促進し、齋宮エリア内の面的・時間的な周遊を促すことで、特定地点・特定時間への観光客の集中を緩和・分散する。		
実施主体	一般社団法人明和観光商社	実施期間	令和7年12月～令和8年2月

【背景・課題】

- 広大な史跡齋宮跡内の移動は大きな課題である。既存グリーンスローモビリティ「牛車」の運行体制強化と魅力向上は、この課題を解決し、環境負荷を低減しつつ物語性豊かな周遊体験を提供することで、来訪者の満足度と周遊性を大幅に高める。
- GPS連動多言語音声ガイド導入は、多様な来訪者の歴史文化理解を深め、体験価値を向上させる。DMOが持つグリーンスローモビリティ運行ノウハウと日本遺産コンテンツ造力性を活かせる最も効果的な受入環境整備策の一つである。

【事業内容】

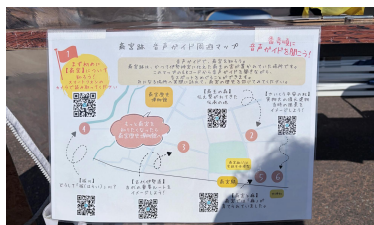
- 既存グリーンスローモビリティ車両2台を活用し、運行ルート・ダイヤ最適化、GPS連動多言語音声ガイド（物語・解説）導入、運転手・ガイド研修強化、オンライン予約利便性向上、主要結節点への多言語案内サイン整備を行う。
- ①計画・準備（ルート・ダイヤ再設計、ガイドコンテンツ企画、研修開発）、②体制強化・実装（研修実施、音声ガイド制作・搭載、予約システム改修、サイン設置）、③運行改善・効果測定（データ収集・分析、継続的改善）、④持続的運営モデル構築の4段階で実施する。

【推進ポイント】

- 日本遺産活用推進協議会（本事業対応WG）と連携し、運行計画・ガイド内容の質を高める。史跡景観と調和する案内サイン等をデザインする。GPS音声ガイドコンテンツは歴史考証の正確性と物語としての魅力を両立させる。運転手・ガイドの継続的な研修とモチベーションを維持する。データに基づく運行ルート・ダイヤの柔軟な見直しと情報発信を行い、事業全体の「祈り」のテーマとの一貫性を保つ。



運転手・ガイドの
人材育成



周遊マップ



駅での案内看板設置

補助事業① **史跡齋宮跡環境配慮型周遊モビリティ運行体制強化と魅力向上事業**

令和7年度事業の目標 (KPI)

指標名 ①公共交通機関からの乗り継ぎ利用率 ②主要施設「以外」での降車・乗車割合 ③利用者満足度アンケートにおける「快適な周遊」実感率

令和7年度に掲げた目標値	事業の成果/目標の検証結果
① 20% ② 30% ③ 70%	① 20% ② 88% ③ 92%

成果の詳細

- 公共交通機関（近鉄齋宮駅）から史跡各拠点への周遊モビリティの実証運行を実施し、自家用車利用から公共交通・二次交通への転換に寄与。乗り継ぎ利用率20%を達成した。また、駅を起点とした移動動線を確立し、来訪者の円滑な周遊を支える二次交通基盤を整備した。
- 駅を起点とした周遊動線を確立したことで、特定地点への集中を抑制し、史跡全体への分散回遊を促す基盤を構築した。
- QRコード音声ガイド対応周遊マップおよび現地ガイドによる解説コンテンツを整備し、来訪者が任意の地点で歴史文化への理解を深めながら周遊できる環境を構築した。移動と解説を統合した体験型の周遊モデルを確立し、史跡全体の回遊促進に寄与した。
- 上記の整備完了後、周遊モビリティ実証運行を計3回実施し、合計199名が利用した。アンケートでは約80%が「移動負担が軽減」、約90%が「地域への理解が深まった」と回答し、本事業が快適な周遊を実現することを検証した。モビリティの本格運用が実現すれば、特定地点・特定時間への観光客の集中を緩和・分散することにつながると考えられる。

令和7年度事業を踏まえた継続課題

- 1 持続可能な運営モデルの構築**
 - 本事業は、将来的な来訪増加を見据えた受入環境整備の第一段階として位置付けられる。本格運用に向けては、イベント時の需要増への対応や、継続運用に向けた運行体制の強化が必要である。また、利用促進に向けた情報発信の充実および有料化を含めた持続可能な運営モデルの構築が求められる。

令和8年度以降の方針

- 1 利用機会の拡大**
 - 土日運行やイベント連携運行の導入等により利用機会を拡大し、予約システムや音声ガイドを活用した利便性向上を図る。
- 2 回遊ルートの最適化・有料化検討**
 - 利用データの分析に基づく運行改善と、有料化を見据えた持続可能な運営モデルの構築を進め、史跡全体への分散回遊と持続可能な観光地マネジメントの実現を目指す。

地域住民と共同した観光振興

補助事業⑮	「明和観光みらい共創レポート」発行による地域への観光裨益共有事業		
事業目的	観光による経済効果や交流の様子を分かりやすく伝え、「観光が地域に良い影響を与えている」という実感と共感を醸成する。これにより、住民の観光への理解を深め、オーバーツーリズム対策を含む持続可能な観光地づくりへの参画意識を高める。		
実施主体	一般社団法人明和観光商社	実施期間	令和7年12月～令和8年2月

【背景・課題】

- 現状では、観光によるメリットが一部にしか認識されていない可能性がある。本事業は、客観的データと具体的な事例に基づき、観光のプラス面を「見える化」して分かりやすく共有することで、住民の観光への理解と支持を高め、地域一体となった取り組みを促進する。
- これは、住民との信頼関係構築と円滑な事業推進の基盤となる。

【事業内容】

- 観光による経済効果（消費額、地元事業者への波及等）、雇用創出事例、文化交流の様子、史跡保全への貢献、観光客からの感謝の声などを、分かりやすくまとめた「明和観光みらい共創レポート」を年1回以上作成・発行する。町広報誌へのダイジェスト掲載、DMOウェブサイト/SNSでの発信、地域イベントでの展示・説明を行う。
- ①掲載情報収集・分析（経済効果分析結果、関連データ集約）、②レポート構成・デザイン制作、③印刷・ウェブ掲載、④広報・共有会実施、⑤効果測定と次号改善。

【推進ポイント】

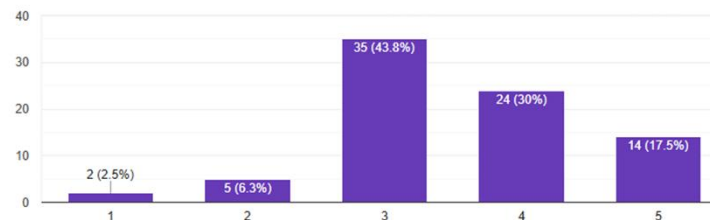
- 経済効果だけでなく、文化交流、環境保全への貢献、住民の生きがい創出といった非経済的な価値も「見える化」し、多角的な恩恵を伝える。専門用語を避け、図やイラスト、写真、具体的な事例を多用し、子どもから高齢者まで誰にでも分かりやすい内容と表現を心がける。レポート作成プロセスに住民代表や若者世代の意見を取り入れる。単なる情報提供に留まらず、レポートを基にした意見交換会やワークショップを開催し、双方向のコミュニケーションを促す。



明和観光みらい共創レポート



住民向け共有会



オーバーツーリズム対策への満足度

補助事業⑮ 「明和観光みらい共創レポート」発行による地域への観光裨益共有事業

令和7年度事業の目標 (KPI)	
指標名	①レポートの町内における認知度・内容理解度 ②住民アンケートにおける「観光が地域に良い影響を与えていると思う」と回答した住民の割合
令和7年度に掲げた目標値	事業の成果/目標の検証結果
① 30% ② +5%	① 100% ② +5% ※実証期間：令和8年2月（住民向け共有会内にて検証）

成果の詳細

- ・ 本事業においてこれまで取り組んできた事業内容や、斎宮における観光による経済効果等をわかりやすく「明和観光みらい共創レポート」として発行した。
- ・ 作成したレポートは、住民向けに認知の場（共有会）を開催し、認知拡大・理解促進を図った。共有会参加者における内容理解度は90%以上と目標数値を達成。
- ・ 住民アンケートにおける「観光が地域に良い影響を与えていると思う」と回答した住民の割合は70%以上と高い評価となった。
- ・ その他、今回のオーバーツーリズムの未然防止・抑制のための取り組みに関する満足度においては、47.5%の方が5段階評価で4以上となった。（全体80名）
- ・ 斎宮の観光の現状や、本事業で取り組んでいる内容についてシンプルにわかりやすく示したことで、内容理解が進んだと考えられる。

令和7年度事業を踏まえた継続課題

地域住民への観光事業の理解浸透

- ・ 参加者における観光が地域へ良い影響を与えているかの評価は高い一方で、裨益の個人としての実感や具体的な裨益イメージが掴めていないケースも多く、レポートを通じて、参加する事業者や個人にどう影響するのかをより明確に示していくことも重要であると考えている。

令和8年度以降の方針

より伝わりやすい表現、掲載内容の検討

- ・ 斎宮における観光促進の取り組みによる裨益が、住民としてどういふことなのか具体的にイメージ・実感できていないことが課題であるため、裨益を実感する地域の人々の声を取り上げながらレポート認知の場を広げていく（年1回の更新・共有を想定）。

5-③. 主な取組（詳細）

地域住民と共同した観光振興

補助事業⑯	めいわ持続可能な観光共創プロジェクト		
事業目的	住民が主体となり、オーバーツーリズム対策に資する小規模・高付加価値な観光コンテンツを企画・運営する人材を育成する。これにより、来訪者の多様なニーズに応えつつ、時間的・空間的な分散を促進し、住民自身が持続可能な観光の担い手となる共創モデルを構築する。		
実施主体	一般社団法人明和観光商社	実施期間	令和7年12月～令和8年2月

【背景・課題】

- 住民自身が地域の魅力を語り伝えることは、最も説得力があり来訪者に深い感動を与える。本事業は、住民が観光の主役となる機会を創出する。人材育成と活動支援を組み合わせることで、住民のアイデアを形にしやすくし、多様な主体による持続可能な観光コンテンツの自発的な創出と地域活動の活性化を促す。
- これは住民のシビックプライド醸成と地域経済への裨益実感に繋がり効果的である。

【事業内容】

- 地域住民を対象に、史跡斎宮跡の歴史文化等を学ぶ「斎宮日本遺産アカデミー（仮称）」を開講。修了者が企画・運営する小規模ツアー等を専門家派遣や広報面で支援する。また、モデル活動支援プログラムとして、住民団体や事業者が提案する活動に対し、DMOが専門家派遣、必要資材提供、広報協力等の直接支援を行う。
- ①人材育成・活動支援プログラム企画、②受講者・支援対象活動募集・選定、③研修実施・専門家派遣等支援開始、④コンテンツ企画・運営OJT・活動伴走支援、⑤成果発表・効果測定と改善。

【推進ポイント】

- 既存の住民組織や地域活動団体と連携し、参加者を広く募る。研修プログラムは実践的な内容を重視。育成した人材や支援した活動が継続できるよう、活動機会の提供、情報共有、専門家派遣などの伴走支援を行う。「モデル活動支援プログラム」は、公募の透明性と審査の公平性を確保し、多様な主体が挑戦しやすい環境を作る。



造成コンテンツ実施の様子



成果発表会

補助事業⑯ **めいわ持続可能な観光共創プロジェクト**

令和7年度事業の目標（KPI）

指標名	①「齋宮日本遺産アカデミー」修了者数 ②アカデミー修了者が企画・造成した新規観光コンテンツ数 ③新規造成コンテンツのうち、オーバーツーリズム対策に資するものの割合	
令和7年度に掲げた目標値	事業の成果/目標の検証結果	
① 15人 ② 5件 ③ 60%	① 15人 ② 5件 ③ 80%	

成果の詳細

- 地域住民を対象に、史跡齋宮跡の歴史文化等を学ぶ「齋宮日本遺産アカデミー」を開講し、21名が修了となった。
- 創出した5件中4件が、時間的分散（ナイトツアー）、エリア外分散（登山、日本酒仕込み）、周辺回遊（凧揚げ）に直結。特定エリアへの滞留を抑制しつつ、「分散すること自体が体験価値になる」モデルを提示した。
- 最終発表会（38名参加）では、DMOが一方向的に提供するのではなく、地域団体（ココツナ等）が主導しDMOが後方支援する体制を確認。住民が当事者として観光に関わることで、シビックプライドの向上と受容性の高い観光地づくりの第一歩を踏み出した。

令和7年度事業を踏まえた継続課題

活動成果の公表、透明性の担保

- 観光アクションが活発化するなかで、KGIである「誇りに思う住民の割合」をさらに引き上げるため、活動の成果や観光による地域への好影響を透明性高く共有し続ける。住民と事業者が協力し合い、「住んで良し、訪れて良し」の齋宮を共に創り上げる体制を深化させていく。

令和8年度以降の方針

住民アイデアに対する継続的な支援

- アカデミー修了者による観光コンテンツの継続的な造成と実装を支援するとともに、チャレンジャー同士の連携強化により周遊パッケージ化を推進し、滞在時間の延伸と分散周遊の定着を図る。
- また、地域住民および団体が主体的に参画する共創型の観光地運営体制を強化し、観光による地域への好影響を共有しながら、持続可能で自律的な観光地マネジメントの確立を目指す。